

地域における障がい者スポーツのあり方に関する研究

－チャレンジドスポーツあきたの事例から－

岸 永理奈 （ 秋田大学 ）

1. 研究の目的

本研究は、チャレンジドスポーツあきたを事例として、学校と地域の関わり方について検討し、地域における障がい者スポーツのあり方を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の方法

- 1) 調査対象 特定非営利活動 (NPO) 法人チャレンジドスポーツあきた 女子バスケットボールチーム
- 2) 調査方法 練習会への参与観察及びチーム監督 I 氏への面接調査法による聞き取り

3. 結果および考察

- 1) 障がい者スポーツクラブと特別支援学校の関わりについて

I 氏は、選手がチームへ加入するプロセスについて、以前は特別支援学校体育連盟が学校を通す必要があったが、現在は選手本人との直接のやり取りが許可されている。また、学校から練習に行かせてくださいとお願いされることもあると回答した。チャレンジドスポーツあきたが学校と連携した活動を継続してきたように、学校と地域スポーツクラブが相互のアプローチを更に活性化することで、学校と地域スポーツクラブで一貫した指導を受けることができると共に、運動をする機会をより多く設けることができるのではないだろうか。

- 2) 障がい者スポーツクラブの地域性における問題点について

障がい者が学校卒業後も継続してスポーツに参加していくためには、選手の家庭の経済的困難の問題を考慮する必要があることを指摘した。選手たちのほとんどが遠方から秋田市内の会場に通っていることもあり、交通費や送迎の問題から練習

に参加したくてもできない選手が多い。この問題の解決のためには、国や県、他の機関からのスポーツクラブに対する支援が必要不可欠である。NPO 法人化したチャレンジドスポーツあきたのように、スポンサーがつくことによって、スポーツに参加したくてもできない人たちをサポートする団体等が増えることで、選手により手厚い支援をすることが可能になるのではないだろうか。

4. 結論

本研究では、障がい者スポーツの活性化により障がい者への差別や偏見を減らしていくことはできないだろうかという問題意識のもと検討を進めてきた。チャレンジドスポーツあきたの選手たちのように、障害をハンデとせず活躍している選手たちの姿を広めていくことで、障がい者に対しての偏見を覆す影響を与えることができるのではないかと。そのためには、人々が障がい者スポーツに興味をもち、焦点を当てるような取り組みが必要であり、選手の姿やチームの活躍をアピールしていくためには地域の人々や組織の協力が必要である。より多くの人々が障がい者の人たちが頑張る姿を目にすることができる環境を作り、「応援したい」と思う人・団体・組織を増加させていくことで、更に障がい者スポーツの知名度や活動の幅が広がり、障がい者スポーツに興味を持つ人が増え、障がい者の競技スポーツの活性化にもつながるのではないだろうか。

5. 主な参考文献

- 1) 上出杏里 (2017) 障がい児からみた障がい者スポーツの課題, The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine, 54(1): 46-54.